

五行で綴る詩2

茶野椀孤

またね

季節はぐるぐると
いつからまわっている
いまもまわっていて
きっと春は来るし
春にまつわるあなたも

モンスター

壁からあらわるは
闇に溶けたはずの思考と
おおよそ消したつもりの時間
畏怖にいろどられた音
私が鳴らした悔い

シンプルなふたりの

シンプルなわたしと
シンプルなあなたと
複雑にまじりあって
複雑な恋に埋もれて
出てこれない

とめる

さりげないひとことを
まるでナイフのように感じ
つきささる痛みを
不治の病だとわめき
時をとめる

流れあるく

歩きながら

見上げれば空

うつむけば地

ふりむけば景色

時は私をここまで

えせ旅人

あやふやに地図を描いて
あやふやにしるしをつけて
そこへ行く
一カ所にとどまらずに
いやとどまれずに

濁った目

不透明な

目玉ごしに見た

世界はとてもキュウクツ

部屋は殺風景で

私はデクのごとくで

空を飛ぶ夢

空を飛んだ

翼は夢の中だけ

自在に空中を移動

自在にあなたと肩を組んで

あなたも夢の中だけ

咲かせよ

陽ざしが舞い降りてくる
ことばを伝えようと
うらぎりのにくしみの
あやまちの過去も
すべては種であると

モンスター2

窓から入ってきた
邪念にこころは乱され
ウツとして今日を
明日を明後日を
死して生きる

聴力

聴こえていた

充分すぎるほど

耳をすまさなくとも

心に響く音は

あんなに聴こえていた

ものくろ

モノクロの時間に

色を付ける私

きっと無くしたものを

空虚で満ちたものを

しあわせと名付けたいの

会いに来たのよ...

遠くから来たのよ
あの山のもっと向こう
あなたを知るよしもない
辺鄙で深い霧の隠す
孤独の最果てから

ダミィ

それはウソである

私の言動は

私のあなたへの

いくつもの言葉は

そもそも私の存在は

ほおん

離れると

遠くなる温度

心のうちがわで

かすかに暖かいのは

未練か郷愁か